別記様式第6

論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（　文学　） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	才華加
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目 (Title of Dissertation)
『般若波羅蜜考究』における「法輪」の研究

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

主　　査 (Name of the Committee Chair)	教授	根本　裕史
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	後藤　弘志
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	末永　高康
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	赤井　清晃
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	川村　悠人
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	高橋　晃一（東京大学）

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

本論文は，17〜18世紀に活躍したチベット仏教ゲルク派学僧ジャムヤンシェーパの著作『般若波羅蜜考究』「法輪」節の議論を精査することにより，彼の経典解釈学の特色とその思想史的意義を明らかにするものである。

論文は序論，本論，付論「翻訳研究」より構成される。序論ではチベットにおける般若学の歴史的展開，ジャムヤンシェーパが創始したラブラン僧院での伝統的な般若学研究の実態，ジャムヤンシェーパの般若学論書『般若波羅蜜考究』各章の成立事情と同書に対する諸註釈文献の特色を概観した後，本研究の目的と方法を示している。

第1章では「法輪」の概念の歴史的変遷と，その定義に関するチベットでの議論について考察している。初期仏教の『転法輪経』では八聖道や四諦に関する仏陀の教説が法輪とみなされていたが，『阿毘達磨倶舎論』では修行者が獲得する無漏の智慧が法輪とみなされるようになったこと，続いてインド大乗仏教およびチベット仏教ゲルク派では，その両者が共に法輪と位置づけられていることを順に論じた上で，ジャムヤンシェーパは仏陀の一切相智を法輪の部類に含める考えを示してサキャ派の見解の不備を指摘した点を明らかにしている。

第2章では大乗経典『解深密経』に由来する三転法輪に着目し，特にその時間性に関するチベットでの議論を考察している。第一に，チベットにおける『解深密経』の受容史を体系的に記述し，同経の章立てをめぐる議論などに関し，新たな知見を提供している。次に三転法輪の時間性の問題に目を向け，12世紀頃に活躍したトプ翻訳官，チャク翻訳官，チム・ナムカタクなどの見解では，三転法輪は仏陀によって段階的に行われたとされるが，ジャムヤンシェーパは敢えてその同時性を主張することにより，「仏陀は一切衆生の救済のために同時的にあらゆる国土であらゆる教えを説く」という大乗仏教的思想を強調した点を明らかにしている。

第3章では三転法輪と密接に関わる了義・未了義の概念に関するインド大乗仏教での伝統的解釈，並びにチベット仏教ゲルク派で提唱された解釈を考察している。第一に，『解深密経』の教えに立脚するラトナーカラシャーンティの『般若波羅蜜教誨』に示される唯識派の見解によれば，了義と未了義の区別の基準は言葉通りの意味理解が成立するか否かという点にあったが，『無尽意経』に立脚するカマラシーラの『中観光明論』に示される中観派の見解によれば，その区別の

基準は勝義諦を主題とする経典であるか否かという点に求められることを指摘する。第二に，ジャムヤンシェーパは中観派の説に依拠し，言葉通りの理解が可能でなくても勝義諦を主題として語られた『般若心経』の言葉は了義であるという点を強調し，整合的な経典解釈を示そうとしたことを明らかにしている。

結論では，ジャムヤンシェーパが経典解釈の整合性・合理性を追究する一方で，多様な解釈の可能性を示すことも同時に目指していた点を指摘し，チベットで発展した経典解釈学の意義を示唆している。

本論文は，仏教思想の根幹をなす法輪の概念を，チベット仏教経典解釈学の視点から再検討した点で独創的である。いくつかの重要概念についての基礎情報の提示に不十分な点も認められたが，大乗仏教思想の救済理論について新たな知見を提供するものとして高く評価できる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)